

やまなかんのん ますだみんぎゆう
山中観音と増田眠牛

春日部は昔から文化活動の盛んなところで、なかでも俳句は非常に流行していたので数多くの句集が発見されている。

春日部市東口都市改造事務所の際にあるお堂を山中観音堂という。山中とは、粕壁宿の町裏の字名あざなで上山中、下山中と呼ばれていた。現在は観音通りと呼ばれている。江戸時代、この道路は内屋しんめいじんじや（谷）大池方面から神明神社付近を経て、岩槻古道に通じていた里道りどうであった。

山中観音は、江戸時代の俳人増田眠牛の菩提を弔うために醤油醸造業の清水家が建立したもので、お堂の中に眠牛が笈おいに納めていた観音画像と杖が安置されている。

江戸時代からの観音信仰は強く、この山中観音にも多くの信者を集めた。しかし、堂が狭いため縁日には世話人宅に画像を納めた厨子ずしを安置して観音経を唱え、参詣者に食事を提供する行事を行なった。この行事は、大正時代まで続けられていた。

増田眠牛は、宝暦年間（一七五一〜一七六三年）の俳人である。眠牛は、千手観音を画いた巻物を納めた笈ろくぶを背に六部姿で風雅の道を求めて漂然と粕壁宿にたどりつき、「伊勢平」という米問屋に旅の草鞋わらじの紐を解いた。その後深い信仰と豊かな俳味生活に入り、晩年を粕壁宿で送り、のちに清水家に奇寓きぐうした。

清水家では、宅地の隅に離れ家を造り、その観音像を祭って眠牛を住まわせた。これが山中観音堂の始めである。眠牛は明和八年（一七七一年）六十歳で没した。

眠牛の逸話のひとつにつきのような話がある。

「伊勢平」が所用のため江戸の旅館に泊っていたある夜、客と囲碁を楽しんでいたが、苦戦となって「下手だなあ、まずいなあ」を連発したところ、偶然にも隣室に当時江戸で活躍していた俳人「こうた蓼太」が同好の客と俳談に余念がなく

五月雨や 或る夜ひそかに

松の月 蓼太

この句を客に示して、その批評を求めていたところであった。

そこへ隣室から「下手だなあまずいなあ」と言う声、蓼太はてつきり自分の句をなぶられたと思い、我慢がならぬと隣室に飛び込んで「私の句のどこが拙ますいか教えてくれ」と詰め寄ってきた。「伊勢平」は驚いて独言は碁の差し手に困ったためのものだと陳謝したが、蓼太は承知せず「伊勢平」を俳人と誤解し激しく追求した。「伊勢平」は閉口して返答を後日に約して帰宅し、このことを眠牛に話して助力を求めた。眠牛は蓼太に会い、その句の非を指摘して「伊勢平」の窮状を救ったという。

かかれぬぞ もういのち毛の

土筆 眠牛

この句は彼の辞世の句である。観音堂の境内に墓標があり、その側面にこの句が刻まれている。

初出「広報かすかべ 昭和五十二年十一月」かすかべの歴史余話